

## P-2

### 呼びかけ語 *title of respect* のコミュニケーション機能：humour を用いたポライトネス

小田希望 (就実大学) onozomi@shujitsu.ac.jp

#### 要旨

本発表では、これまで詳細に論じられてこなかった *sir, ma'am, Your Honor* などの *title of respect* タイプに分類される英語の呼びかけ語(以下 *title of respect*)が持つコミュニケーション機能をポライトネスの観点から明らかにする。*Title of respect* を無標と有標の用法に分け、とくに有標の *title of respect* が humour の手段として、対人コミュニケーションでどのように働くのかに焦点を絞る。まず、無標の *title of respect* は聞き手への敬意を表し、聞き手を話し手より上位に位置づける「敬意表示機能」を持つため、聞き手の *negative face* 欲求に働きかける *negative politeness* として働くことを確認する。さらに、humour として用いられる有標の *title of respect* は、*negative politeness* だけでなく、聞き手との連帯感を表すことで聞き手の *positive face* 欲求に働きかける *positive politeness* のストラテジーとしても同時に働くことを論じる。

#### 1. はじめに

呼びかけ語は「呼びかけるときに話し手が聞き手を表すのに使用する名詞(句)」と定義できる(小田 2010)。日常会話での使用頻度に比して、呼びかけ語はしばしば付随的な言語要素としてみなされ、従来、おもに *call*(会話運営機能)と *address*(対人関係機能)の2機能への指摘にとどまる(Quirk *et al.* 1985; Braun 1988; Leech 1999; Levinson 1983; 小田 2010)。*Title of respect* に関しても、敬意(*deference*)を示す呼びかけ語であるとの言及が散見するばかりで、その語用論的機能を論じる研究は見当たらない(Thomas 1995; Leech 1999; Whitcut 1980; Zwicky 1974)。しかし、詳しく分析すると、各タイプがコミュニケーションの中で話し手と聞き手の間の対人関係調整機能を個別に持ち、Brown and Levinson (以下 B&L)(1987)の提唱するポライトネス理論の観点から捉えると興味深い *politeness strategy* として働くことが分かる。

そこで、本論は *sir, ma'am, Your Honor* などの *title of respect* が持つコミュニケーション機能をポライトネスの観点から明らかにすることを目的とする。とくに、humour の手段として用いられる有標(*marked*)の *title of respect* が、どのように対人コミュニケーションで働くのかを考察する。まず2節では *title of respect* の意味論的特性を確認し、3節からそのコミュニケーション機能を詳しく分析する。

#### 2. *title of respect* の意味論的特性

*Title of respect* に分類されるのは、話し手が聞き手に対する敬意を表す敬称である(Biber *et al.* 1999: 1109-1110; 小田 2010: 17)。聞き手への敬意を表すということは、言語表現上、話し手は聞き手を自分より上に明示的に位置づけることを意味する(小田 2010: 29)。典型的な例を(1)に挙げよう。

(1) [Elizabeth curtsies low to Queen Mary.]

Elizabeth: Thank you, **Your Majesty**....

(Elizabeth<sup>1</sup>)

16世紀のイギリスを舞台とする(1)は、Elizabeth(次期イギリス女王)が Queen Mary に宮廷に呼ばれた際の発話である。深くお辞儀をしながら、Elizabeth は *Your Majesty* という *title of respect* を用いることで Queen Mary に対する敬意を示す。

Title of respect は、(2)の敬称のみで使用される「zero 型」と、(3)の通常 my あるいは your を伴う「my 型」「your 型」の 3 種類に分けられる(小田 2019: 46-47)。

(2) zero 型 : *ma'am, madam, maestro, master, miss, mister, sir*

(3) a. my 型 : *Lady, Lord*

b. your 型 : *Eminence, Excellency, Grace, Highness, Holiness, Hono(u)r, Imperial Highness, Imperial Majesty, Ladyship, Lordship, Majesty, Royal Highness, Royal Majesty*

(2)の zero 型は、*Miss Ford* のような title + last name の用法とは異なり、敬称のみが単独で呼びかけ語として使用される(小田 2010)。(3a)の my 型は、話し手から見た聞き手の地位(title)を表す語であるのに対して、(3b)の your 型は、聞き手が持つ(と話し手が考える)特性を表す語である(小田 2019)。

現代英語では zero 型は頻繁かつ無標の用法で用いられることが多いのに対して、(3)の title of respect は、全体的に使用頻度も低く、法廷の場での裁判官、あるいは、王室・皇室の人間に聞き手を限定する特定のコンテキストでのみおもに使用される(小田 2019)。そのため、興味深いことに、それ以外のコンテキストで(3)の呼びかけ語が使用される場合、その発話には有標性(markedness)が生じる。

### 3. title of respect のコミュニケーション機能

3 節は、ポライトネスの観点から title of respect が果たす語用論的機能を考察する。B&L (1987)によると、誰もが「他者に受け入れられたい・良く思われたい」という欲求を持つ positive face と「他者に邪魔されたくない・踏み込まれたい」という欲求を持つ negative face の両面を持つとされる。ポライトネスとは良好な対人関係のための対話者同士によるフェイス保持(face-saving)戦略とされ、対話者は出来るだけお互いのフェイスを脅かす行為(face-threatening act: 以下 FTA)を互いに避けようとする。

Title of respect もポライトネス理論から捉えると、politeness strategy の働きを持つことが分かる。まず、無標の title of respect のコミュニケーション機能を小田(2019)に基づいて確認する(3.1 節)。つぎに、humour の手段として使用される有標の title of respect の働きを詳しく分析する(3.2 節)。

#### 3.1 無標の title of respect

前述したように title of respect は、聞き手に対する敬意を表し、話し手より聞き手を明示的に上に位置づける。つまり、title of respect は対人コミュニケーションにおいて「敬意表示機能」を果たす。これをポライトネスの観点から捉えると、title of respect は、聞き手に敬意を示して対人距離を保つことで「他者に自分の領域に踏み込まれたい」という欲求を持つ聞き手の negative face に働きかける。

では、無標の title of respect が聞き手のフェイスを脅かす可能性が低い発話と共起する場合(3.1.1 節)、聞き手のフェイスを脅かす可能性が高い発話と共起する場合(3.1.2 節)に分けて、順にポライトネスの観点からコミュニケーション機能を見ていこう。

##### 3.1.1 聞き手のフェイスを脅かす可能性が低い発話 + title of respect

聞き手のフェイスを脅かす可能性が低い発話と title of respect が共起する場合を分析する。

(4) Linus: Good morning, Fairchild.

Fairchild: Good morning, **sir**. Beautiful day, sir.

(Sabrina)

(5) Madame Garderobe: **Maestro**, you were so brave. Goodbye, mi amor.

Maestro Cadenza: Amore. No! Don't leave me.

(Beauty and the Beast)

(4)では、専属運転手の Fairchild が自分の雇い主 Linus に対して挨拶をする。挨拶は「他者に行動の自由を邪魔されたくない」という聞き手の negative face 欲求を脅かす可能性が潜在的にないわけではない。しかし、雇い主からの挨拶を無視するほうが一般的に考えて聞き手に対する FTA の可能性は高い。また、挨拶は Malinowski(1923)の言う交感的機能(phatic communion)を果たすスモール・トークにあたるため、聞き手の negative face を脅かす可能性は低いと考えると良いだろう。聞き手の negative face を脅かす可能性の低い発話に、さらに *sir* という title of respect を用いて聞き手への敬意を表し、話し手は聞き手の negative face に配慮を示す。つまり、話し手は title of respect の「敬意表示機能」を用いて、発話全体として聞き手の negative face を侵害する潜在的可能性をできるだけ低くしようとするものと考えられる。

(5)の Garderobe 夫人は、聞き手に *maestro* と呼びかける。これも聞き手に対する「敬意表示機能」が働き、聞き手の negative face 欲求に働きかける。そこに、さらに“you were so brave.”という賞賛を表す発話が共起する。「賞賛」は聞き手の能力を評価するため、「他者に認められたい、評価されたい」という聞き手の positive face を脅かす可能性が低い。むしろ、賞賛は聞き手の positive face 欲求を満たす方向へ働きかける。その結果、発話全体として聞き手のフェイスを脅かす可能性がより低められる。

B&L(1987: 183)は、title of respect は FTA の可能性が高い発話とのみ使用が適切であるとするが、上記のような例は珍しくはなく、単に発話に有標性が生じない無標の使用である。Title of respect は、聞き手のフェイスを脅かす可能性が低い発話状況ではデフォルト機能の「敬意表示機能」のみを発揮する。

### 3.1.2 聞き手のフェイスを脅かす可能性が高い発話+ title of respect

つぎに、聞き手のフェイスを脅かす可能性が高い発話と title of respect が共起する場合を見る。

(6) Jeremy: Look at me! ... **Sir!** It's my private life.

Scott Guber: ... I agree.

(Boston Public 2x30)

(7) Queen Mary: Why will you not confess your crimes against me?

Elizabeth: Because, **Your Majesty**, I have committed none.

(Elizabeth)

(6)では、高校生 Jeremy が感情的になり、自分が通う高校の教頭 Scott Guber に強い口調で「命令」をしてしまう。しかし、その直後に冷静になり、聞き手に対する敬意を表す *sir* という title of respect を急ぎ付け加える。命令は、「他者に行動の自由を妨げられたくない」という聞き手の negative face 欲求を脅かす可能性が高い発話である。そこに、敬意表示機能によって聞き手の negative face 欲求に働きかける *sir* を重ねることで、話し手は、発話全体として聞き手の negative face に対する FTA の可能性を緩和しようとすると考えられる。と同時に、この敬意表示機能は、呼びかけ語を含む発話全体の発語内力に二次的に影響して、相乗効果的に発話全体として「命令」の発語内力を弱めるよう働く。この「弱め効果」は、title of respect の敬意表示機能による二次的な発語内力調整作用と考えられる。

(7)では、自らの罪を白状するように求められた Elizabeth が、罪は犯していないと「否定」の発話を女王にする。否定は、聞き手の考えが間違っていると話し手が考えることを表すため、「他者に認められたい、評価されたい」という欲求を持つ聞き手の positive face を脅かす可能性が高い。その「否定」の発話の途中で、話し手は *Your Majesty* と title of respect を挿入する。Title of respect が持つ「敬意表示機能」

は、聞き手の **negative face** 欲求に配慮を示す。総合的に、話し手は、発話全体として聞き手のフェイスに対する配慮を行い、フェイス侵害度を緩和しようとする。と同時に、この敬意表示機能が、呼びかけ語を含む発話全体の発語内力にも二次的な影響力を及ぼして、相乗的に「否定」の発語内力も弱める。

無標の **title of respect** が聞き手に対する FTA の可能性の高い発話と共起する場合、その「敬意表示機能」が発話全体として聞き手に対する FT 緩和の働きをする。さらに、二次的に呼びかけ語を含む発話全体に対して発語内力調整作用である「弱め効果」が相乗的に働くことを見た。

### 3.2 有標の **title of respect**

本論は、有標の **title of respect** を **humour** として使用されたものに限定する。現代英語では **title of respect** は、聞き手への敬意を純粋に表すためよりも、むしろ冗談でしばしば使用される (Leech 1999: 112-113)。とくに **my** 型、**your** 型の **title of respect** はその傾向が強いと言えよう。

有標の **title of respect** を分析する前に、**humour** の定義を確認しておく。本論は、Tannen (1984: 163-164) の定義に従い、話し手が文字通りの意味を意図せず、会話の参加者を面白がらせようという意図があるようだと理解される発話(呼びかけ語)を **humorous** な使用とする。

さらに、ポライトネスの観点から捉えると、**humour** は相手との連帯感・仲間意識を表すことで「他者に受け入れられたい」という欲求を持つ聞き手の **positive face** に配慮を示す (Holmes 2000, Norrick 2003)。

以上を踏まえると、**humour** として使用される有標の **title of respect** は、聞き手の **negative/ positive face** の両方のフェイス欲求に配慮を示す **negative/ positive politeness** として働くと考えられる。まず、「ふり」ではあるが、言語表現上は話し手から聞き手への敬意を表すため、無標の場合と同様、聞き手の **negative face** 欲求に配慮を示す形となる。と同時に、**humour** として聞き手との連帯感・仲間意識に訴えて聞き手の **positive face** 欲求にも働きかける。

では、有標の **title of respect** の具体例を分析しよう。有標の場合も、呼びかけ語と共起する発話が聞き手に対して FTA の可能性が低い場合(3.2.1 節)、高い場合(3.2.2 節)に分けて順に見ていく。

#### 3.2.1 聞き手のフェイスを脅かす可能性が低い発話 + **marked title of respect**

まず、呼びかけ語と共起する発話が聞き手の **negative face** を脅かす可能性が低い場合を考えよう。

(8) Ducky: “The sky is blue, the grass is green, may we have our Halloween?” That was how we used to say “Trick or treat” in Scotland.

Sarah : [as he gives her some candy] Thank you.

Ducky: You’re very welcome, **Your Highness**. (NCIS 4x7)

(9) Abby: [to her husband] Bye. See you later, **Your Honor**. (The Firm)

(8)の感謝に対する Ducky の「どういたしまして」が、聞き手である少女の **negative face** を脅かす可能性は低いだろう。そこに、話し手は **Your Highness** という表現上聞き手の **negative face** へ配慮を示す呼びかけ語を使用する。他方、一般市民である聞き手に対する **Your Highness** は **humour** を込めて用いられたと理解されるので、この **title of respect** は「他者に受け入れられたい」という聞き手の **positive face** 欲求にも働きかけることとなる。結果として、**title of respect** の使用によって、話し手は聞き手の両方の **face** 欲求へ配慮を示すため、共起する発話全体では、聞き手に対する FTA の可能性がより一層低められる。

(9)の *Your Honor* も同様である。Abby の「またあとでね」という挨拶も、聞き手である夫への FTA の可能性は低い。一方、弁護士ではあっても裁判長ではない夫に対する *Your Honor* の使用は、この発話状況では適切ではない。しかし、親密な対人関係にある夫に、あえて敬意表示機能を持つ *title of respect* を用いることで発話に *humourous* な効果を生み、「他者に受け入れられたい」という欲求を持つ聞き手の *positive face* に働きかける。と同時に、言語表現上、*title of respect* で敬意を表す「ふり」をすることで、話し手は聞き手の *negative face* にも配慮を示すことができる。その結果、発話全体としては、聞き手の *negative/ positive face* 両方の欲求に配慮を示すことで聞き手に対する FTA の可能性がさらに低められる。次に、共起する発話が聞き手の *positive face* を脅かす可能性が低い場合を見よう。

(10) Noel: You heard something, didn't you?

Roz: [dazed] Yeah.

Frasier: Roz, are you all right?

Gil: Of course not. She's ashen with terror. Spit it out, Roz. Who's the jack-booted tyrant whose fanny I'll be kissing till God knows when?

Roz: Me.

Gil: [kneeling] Joyful news, *Your Majesty*. (Frasier 11x24)

(11) Garfield: Hey, they could have used you in Alcatraz. I just wanted to say, thanks *Your Majesty*. And break a leg. (Garfield)

(10)の Gil はテレビ局長に任命された Roz に祝福の発話をする。これは聞き手の *positive face* に対する FTA の可能性は低いだろう。むしろ「他者に認められたい」という聞き手の *positive face* 欲求を満たす方向に働く。そこに *Your Majesty* が加えられる。*Title of respect* は、表面上は「敬意表示機能」によって聞き手の *negative face* に配慮を示す。と同時に、この発話における *Your Majesty* は、聞き手を女王であるかのように扱った *humour* である。そのため、聞き手の *positive face* 欲求を満たす方向にも働きかける。その結果、発話全体としては、聞き手に対する FTA の可能性がさらに低められる形となる。

(11)では、檻から脱出するのを手助けしてくれた相手に、Garfield は感謝を表す。感謝の発話も、聞き手の *positive face* に対する FTA の可能性は潜在的に低く、どちらかといえば、聞き手の「他者に認められたい」という *positive face* 欲求を満たす方向に働くだろう。さらに、共起する *Your Majesty* は、表現上、敬意表示機能により聞き手の *negative face* に配慮を示す。と同時に、王室関係者ではない聞き手への *Your Majesty* は明らかに *humour* として使用されていると理解される。そのため、聞き手の *positive face* にも配慮を示す。結果的に、発話全体として、聞き手に対する FTA の可能性がより低められる。

### 3.2.2 聞き手のフェイスを脅かす可能性が高い発話 + marked *title of respect*

次に、聞き手のフェイスを脅かす可能性が高い発話と有標の *title of respect* が共起する場合を分析する。まず、聞き手の *negative face* に対して FTA の可能性が高い発話例を見よう。

(12) Brenda: *Mister*, you had better shape up or you will miss your sister's wedding.

Mike: Promise? (16 candles)

(13) [George is munching on pretzels from a bag]

Cosmo: [to George, who is wearing women's glasses] May I have one of those, *madam*? (Seinfeld)

(12)では、母親が息子に忠告の発話をする。忠告は、「他者に行動の自由を妨げられたくない」という欲求を持つ聞き手の *negative face* を脅かす可能性が高い。他方、共起する *mister* という *title of respect* は、表面上、聞き手への敬意を表す。つまり、聞き手の *negative face* 欲求に配慮を示す形になる。と同時に、まだ10歳の息子を大人同様に *mister* と呼ぶため、通常これは *humour* と理解される。そのため、聞き手の *positive face* 欲求にも働きかける。話し手は *humorous* な *mister* によって聞き手の両フェイスに働きかけ、発話全体として聞き手への FTA の可能性を低くしようとする。さらに、間接的に、共起する発話の発語内力に影響が及び、忠告の発語内力も相乗効果で弱められる「弱め効果」が発揮される。

(13)も同様の働きが見られる。Cosmo は George にお菓子をもらおうと依頼をする。依頼の発話も聞き手の行動の自由を妨げるので *negative face* を脅かす可能性が潜在的に高いとされる。そこに話し手は *madam* という呼びかけ語を用いる。言語表現上は、*title of respect* が聞き手に敬意を表して、聞き手の *negative face* に配慮を示す。しかし、女性用メガネをかけていることをからかって、話し手は聞き手(男性)に女性を表す呼びかけ語を使用するため、これも *humour* と解釈される。*Humour* としての *title of respect* は、聞き手との連帯感を強調して聞き手の *positive face* 欲求にも働きかける。その結果、総合的に話し手は *title of respect* を用いて発話全体として聞き手のフェイスを脅かす可能性を低くしようとする。また、二次的に発語内力調整作用が働き「依頼」の発語内力も相乗効果的に弱められる。

最後に、*title of respect* と共起する発話が聞き手の *positive face* を脅かす可能性が高い場合を見よう。

(14) Swanney: Would sir care to pay for his bill in advance?

Renton: No, stick it on my tab.

Swanney: Ah, I regret to inform **sir**, credit limit was reached and breached some time ago.

Renton: Oh, well, in that case. [Renton pulls some money from his pocket.]

Swanney: Ah, hard currency. That will do nicely. Can't be too careful when dealing with your type, can we, sir? (Trainspotting)

(15) Rusty: Okay. Well, Gus says the restaurant world has its own set of rules, like not ringing up drinks and money under the table. It's lots of looking the other way.

Sharon: It's irrelevant, **Your Honor**. It may be an atypical workplace, but it is still covered by the justice system. (Major Crimes 6x6)

(14)の麻薬売人 Swanney は客の Renton に対してつけ払いを断る。「断り」の発話は、「自分の欲求が他者にとっても好ましいものであってほしい」という欲求を持つ聞き手の *positive face* を脅かす可能性が高い。そこに、*sir* という「敬意表示機能」を持つ呼びかけ語を挿入して、話し手は表面上、聞き手の *negative face* に配慮を示す形をとる。しかし、現実の聞き手は麻薬中毒者で金もない。その聞き手に対して、話し手は *sir* を使用して、*humour* として相手を上流階級の上客を扱うかのようなふりをする。そのため、*sir* は聞き手の *positive face* にも働きかける。結果として、聞き手の両フェイス欲求に配慮を示す形となり、発話全体として総合的に聞き手に対する FTA が低められる。さらに相乗的に、共起する発話の発語内力にも間接的に働きかけ、断りの発語内力が弱められる「弱め効果」が働く。緩和表現なく断るのではなく、有標の *title of respect* によって聞き手を持ち上げつつ *humorous* に断るわけである。

(15)では、弁護士を目指す息子 Rusty が、不当解雇された友人の話をもつ Sharon に相談する。息子の話に対して、母親は飲食業界であろうと司法制度は適用されると息子の意見を否定する。否定の発話も、

「他者に認められたい」という欲求を持つ聞き手の **positive face** を脅かす潜在的可能性は高い。そこに、話し手は呼びかけ語 *Your Honor* を用いる。これは、弁護士志望とはいえ、まだ学生である聞き手への **humour** を込めた呼びかけ語とふつつ理解されよう。この有標の **title of respect** を付加することで、話し手は、敬意表示機能により聞き手の **negative face** に表面上配慮を示すことになる。さらに、**humour** と解釈されるため、聞き手の **positive face** 欲求にも働きかけることができる。その結果、発話全体としては、聞き手のフェイスを脅かす可能性が低められる。また、相乗効果として、「否定」の発話内力に対する「弱め効果」も働く。

#### 4. まとめ

以上、**title of respect** のコミュニケーション機能を考察した。**Title of respect** の「敬意表示機能」は、無標の用法では **negative politeness** として働く一方、**humour** として用いられる有標の用法では聞き手の両フェイス欲求に働きかける **negative/ positive politeness** の両方の働きを示した。さらに、無標・有標ともに **title of respect** を聞き手のフェイスを脅かす可能性が高い発話と使用する場合、話し手は発話全体として聞き手に対する FTA をなるべく低くしようとすること、また、間接的にその発話の発話内力にも二次的な影響が及び発話内力が弱められる「弱め効果」が発揮されることも論じた。

注 1. 使用データはすべて映画あるいはテレビドラマのスク립トからである。

#### 参考文献

- Biber, Douglas, Stig Johansson, Geoffrey Leech, Susan Conrad, and Edward Finegan (1999) *Longman Grammar of Spoken and Written English*. London: Longman./ Braun, Friederike (1988) *Terms of Address*. Berlin: Mouton de Gruyter./ Brown, Penelope and Stephen C. Levinson (1987) *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press./ Holmes, Janet (2000) Politeness, power and provocation: How humour functions in the workplace. *Discourse Studies*, 2(2): 159-185./ Holmes, Janet and Meredith Marra (2002) Over the edge? Subversive humor between colleagues and friends. *Humor*, 15(1): 65-87./ Leech, Geoffrey (1999) The distribution and function of vocatives in American and British English conversation. In Hilde Hasselgård and Signe Oksefjell (eds), *Out of Corpora: Studies in Honour of Stig Johansson*, 107-118. Amsterdam: Rodopi./ Levinson, Stephen C. (1983) *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press./ Malinowski, Bronislaw (1923) The problem of meaning in primitive languages. In Charles Kay Ogden and Ivor Armstrong Richards (eds.) *The Meaning of Meaning*, 146-152. London: Routledge and Kegan Paul./ Norrick, Neal R. (2003) Issues in conversational joking. *Journal of Pragmatics*, 35(9): 1333-1359./ Norrick, Neal R. and Alice Spitz (2010) The interplay of humor and conflict in conversation and scripted humorous performance. *Humor*, 23(1): 83-111./ 小田希望 (2010) 『英語の呼びかけ語』大阪教育図書/ 小田希望 (2012) 「呼びかけ語 familiariser のコミュニケーション機能」『就実英学論集』 29: 61-93./ 小田希望 (2019) 「呼びかけ語 title of respect のコミュニケーション機能」『就実英学論集』 35: 45-63./ Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman./ 滝浦真人 (2008) 『ポライトネス入門』 研究社/ Tannen, Deborah (1984) *Conversational Style*. Oxford: Oxford University Press./ Thomas, Jenny (1995) *Meaning in Interaction: An Introduction to Pragmatics*. London: Longman./ Whitcut, Janet (1980) The language of address. In Leonard Michaels and Christopher Ricks (eds.), *The State of the Language*, 89-97. Berkeley; Los Angeles; London: University of California Press./ Zwicky, Arnold M. (1974) Hey, Whatsyourname!. *Chicago Linguistic Society*, 10: 787-801.